

百人習抄



此首の意は黄門 （書） 小倉山名乃陸の如紙形也

そは （書） 百人一首と号するは乞と捨とありて事新

在 （書） 今又今作と捨まじ也物之定家所し養神止る也

乃 （書） 倉と捨ると紙行つりさるるよりて古乃捨交新たての

四 （書） 叶しととととと之明月形と粒々なりとととととのた

の （書） 折へり也と治め長とけりひくお城乃福とら捨と言と

根 （書） 字折して紙紙持毎葉とまるとままとて紙は集束之紙

紙 （書） と字とて言ととととととととととととととととととと

と （書） 昔 （書） 心 （書） 也 （書） あり （書） とい （書） たり （書） 事 （書） と （書） 情 （書） く （書） あり （書） 心 （書） 新 （書） あり

在 （書） 今 （書） 百 （書） 人 （書） の （書） 身 （書） と （書） 捨 （書） と （書） 山 （書） 名 （書） と （書） 乃 （書） 陸 （書） の （書） 如 （書） 紙 （書） 形 （書） 也 （書） 言 （書） と

言 （書） と （書） 言 （書） 一 （書） 七 （書） 花 （書） と （書） 乃 （書） 倉 （書） と （書） 乃 （書） 陸 （書） の （書） 後 （書） 後 （書） 中 （書） 川 （書） 院 （書） の （書） 却 （書） 持 （書） 物 （書） と

と （書） 乃 （書） 倉 （書） と （書） 乃 （書） 陸 （書） の （書） 後 （書） 後 （書） 中 （書） 川 （書） 院 （書） の （書） 却 （書） 持 （書） 物 （書） と （書） 乃 （書） 倉 （書） と （書） 乃 （書） 陸 （書） の （書） 後 （書） 後 （書） 中 （書） 川 （書） 院 （書） の （書） 却 （書） 持 （書） 物 （書） と

其年あつてうに成るに渡りてその年と云ふる又自名
しと云ふる年と云ふるの事おぼふと云ふはたふらぬと云ふは
おぼふに堪へりしと云ふは心算けぬ年と云ふは其
うにあつては心算とて播入るはたふらぬと云ふは
骨肉と云ふはたふらぬと云ふは後醍醐天皇の心算と云ふは
心算と云ふは

諱葛城

天智天皇

在位十年

近江國大津宮

葛城郡

舒明天皇

天智天皇

舒明天皇崩天下諒闇系圖最底諒
弓道天皇高城天皇又弓道天皇
初創

天武天皇

持統天皇

茅渟王

皇極天皇

有間白子

元明天皇

後醍醐天皇

秋乃田のあかあか天皇の事いふは我々もいふはあかあか天皇の事いふは

万 万の事いふはあかあか天皇の事いふはあかあか天皇の事いふは

新羅の時よりあかあか天皇の事いふはあかあか天皇の事いふは

田中藤原
 新門天皇
 帝位
 給て八百余
 國母
 該
 勿論

我々の皇子は福園の時父の門を以てして極楽といひ
 てより後と地を以てして極楽といひて極楽といひ
 ぬのの屋とわけがたしや壇と極ともいふ
 也日月易月といひて十日侍所といひて十月
 以てあるを事おさるる日といひてあはれと
 日状といひて易とていふれとて秋の白
 乃後といひて屋は道行のあはれとて白家と
 ねりやとて屋といふれとて家とてあはれ
 とて下とて年といふれとてあはれとて家とて百人
 首の美衣といふれとて國と福園といふれ
 明天王の始りといふれとて家とて家とて百人
 を以てといふれとて同奥といひていふれ

我に昔得し相傳二邊の時と書書といふれ
 ほうほうとて一且と奥義といひていふれ
 なること見ゆべし也

二 持統天皇

天智天皇第二皇女又鷹野藤原
 詳 東宮廣野御身之先許中

御母越智姫 大皇孫御女
 天武天皇皇后

苗裔白皇女 系天皇智仁見
 都和國高野郡藤原

大寶二年十二月十日崩

形在礼 戸一

昔のそと友といふけり白の衣といふありは
 こゝろまゝといふれとていふれとていふれといふれ
 ともいふれといふれといふれといふれといふれ
 や二月既去三月己未世をまゝいふれといふれ
 今つはは新有在余友族の巻を以て入りて東家の

たつとあつたの歌とつたや夜夢のこゝろに

三 持宗入唐天智中皇御時人

教光完郷人丸頼が本夫姓持宗名を分りて長年之歎

心持統文武之聖朝退新田高市之皇女

拾遺記
百

汗乃心身のおりてり尾北ありては秋篠宮

はちのりおつて歎かしくまひてる皇女はたし

ふりつり心身お尾のまはりあつてしむくあは

夜とつたつて海いなりあつてあつてあつて

とつたつたつたつたつたつたつたつたつた

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

山遺赤人 又祖不詳 神皇 天年之念也

我聖武御時人の一説は同時人

右今序さすはあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

新在
萬三

思ひあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

世尋万葉あり別書と云 小部赤人望不盡山

歎一首并短歎

天地之分時後神大傳年高着駿河有布土能高屋

嶺寺天眉振放身者度月之涯元遠は思月乃

元元不見白雲お伴去波波伐加利時自久曾雪者

落家留 諸告言 继将性不盡 高嶺者

返款 田兒之浦 從打出而見者 身白衣不盡
此高嶺 亦雪波零家留

在乃方之打出くみきまのりおそく一のあひひし
雪をさうりまるとまじりりとお白妙しか一雪の清けら
とありて一はけて 新在春よ合れらりば音一を
田子の浦のころひみれにまむくみまの味ら
たぐりて心刻しとよらぬ 浦さるる浪の音とん
くらんとく入るく冷味とく一海音の面白さ
くとも浪の音はあまらんと刻し出とまめめ
まはらつうらとくひれくくくを音異あはに
本の家と在今やああやぐまをりとりり

奇妙なるなり ねば音のさうははにこのうけ
いなり 南意即妙なり 淫と思ふなり

五 猿丸全 三侍云 官姓時代は不知之

或系園云 用明太子聖德太子 尊大元玉
前王祇江云 未武乃以子 前送鏡号とまは流
不書 聖迹太子乃沖孫も前と猿丸全
号くくく 遺流法師とくく前とまは
さあやとくくく 又下好回業師とくく
流くくく 是と遺流事く流罪の時時
國業師寺の自くくく 注此かあや
鴨長明方丈記 遊河内田上 猿丸全四巻

わく心とて家少とけ時麻のしとく時麻のしとく
は奇い奥山とつうりお文字野々への樹とて
く心とて家少とつうりて奥山の本のく心とつうり
後と麻とて家少とつうりてく心とつうりて
みらりて奥山とつうりてく心とつうりて
く心とつうりて後と麻とつうりて
おく又後と麻とつうりてく心とつうりて
おくく心とつうりて後と麻とつうりて
麻とつうりて後と麻とつうりて
おくく心とつうりて後と麻とつうりて

六 中納言家持

天平元^{乙丑}生 出原^旅家持

大伴宿禰安磨

大納言
照任二位

大伴宿禰旅人

大納言
又名多麻呂

家持

一説天智天皇大伴皇子

照任注
与多

都階^小牟磨

黒主

夜須^原家持

松玄黒主の弟乃夜須良磨家磨と同一可也
從三位中納言春宮守中宮守大臣大伴大宰^大哉
かくつ流るり又征夷大將軍し位と

延暦少年八月

度

在流奥國莞其骸^子未葬廿餘日

大伴継人

行良

射殺中

納言從三位兼行春宮人

史記奥羽相按察使鎮守府將軍大伴宿禰家持

新古のしとくけしとくをわの白とて後と麻とつうりて

行略之也奇之家持乃為楊之日年也均也

七 安信仲唐

考元香皇御子末廣命後 倉橋丸 大友臣始

一說內唐古傳云 船中子 本誓師 從三位安信朝衡息 一傳唐

又云不細言朝平男 私云此為義我其以不審系因

亦不載之又從之信朝衡大細言朝平末公御補任不

身之旁以不足信用

元正香皇靈龜二年八月廿一日為皇子生後唐朝賜

姓朝臣 又流成天皇御宇九年卒相藤原

繼重 唐朝遣 時瑞朝 此義不審

元正香皇靈龜二年 從德香皇御位始 百年

及斗如何 又或抄云仲丸遠唐使在武御時

是又不審 江談第一云仲丸讀歌本靈龜

二年為遠唐使仲丸渡唐之後不瑞朝於

漢家樓上餓死吉備大臣後渡唐之時見鬼狀

吉備大臣言該相教唐事仲丸不瑞朝人也

讀牙雖不可有林示志尚不快欣如仲

意 或記曰仲唐者榮意星命也 深和國輔王道

異國天文陰陽異朝人仰思之令祭祠而逐殺仍為

靈龜依人吉備丸渡唐之時見鬼異狀教授天

文曆術筆卦儒書令末朝一仍仲唐殊業

亦猶達天文傳其業 治湯道中 安信氏八

天文道本 清明 先祖也

身之旁以不足信用

丁原ありとけなむすのむらにまはるる出はる

は等々昔ありとけなむすのむらにまはるる出はる

小法師のついでにまはるるあまの年とてまはる

まはるるついでにまはるるあまの年とてまはる

けなむすのむらにまはるるあまの年とてまはる

あまの年とてまはるるあまの年とてまはる

あまの年とてまはるるあまの年とてまはる

あまの年とてまはるるあまの年とてまはる

あまの年とてまはるるあまの年とてまはる

あまの年とてまはるるあまの年とてまはる

あまの年とてまはるるあまの年とてまはる

あまの年とてまはるるあまの年とてまはる

あまの年とてまはるるあまの年とてまはる

あまの年とてまはるるあまの年とてまはる

あまの年とてまはるるあまの年とてまはる

あまの年とてまはるるあまの年とてまはる

あまの年とてまはるるあまの年とてまはる

あまの年とてまはるるあまの年とてまはる

あまの年とてまはるるあまの年とてまはる

あまの年とてまはるるあまの年とてまはる

あまの年とてまはるるあまの年とてまはる

あまの年とてまはるるあまの年とてまはる

あまの年とてまはるるあまの年とてまはる

あまの年とてまはるるあまの年とてまはる

山を今にして才の方と後集の歌文初
は等と表裏の流りの妙と云う歌の流るる花
所と云うと云ふもよひと世と云うたこもくとも
之屋はらも花をいふと云う花いふと云う花をい
うと云うと云うと云うと云うと云うと云うと云う
何と云うと云うと云うと云うと云うと云うと云う
才と云うと云うと云うと云うと云うと云うと云う
おと云うと云うと云うと云うと云うと云うと云う
と云うと云うと云うと云うと云うと云うと云う
由多と云うと云うと云うと云うと云うと云うと云う
は等と云うと云うと云うと云うと云うと云うと云う
由多と云うと云うと云うと云うと云うと云うと云う
は等と云うと云うと云うと云うと云うと云うと云う

花を初に言ふと云うと云うと云うと云うと云うと云う
花を初に言ふと云うと云うと云うと云うと云うと云う
花を初に言ふと云うと云うと云うと云うと云うと云う
花を初に言ふと云うと云うと云うと云うと云うと云う
花を初に言ふと云うと云うと云うと云うと云うと云う
花を初に言ふと云うと云うと云うと云うと云うと云う
花を初に言ふと云うと云うと云うと云うと云うと云う
花を初に言ふと云うと云うと云うと云うと云うと云う
花を初に言ふと云うと云うと云うと云うと云うと云う
花を初に言ふと云うと云うと云うと云うと云うと云う
花を初に言ふと云うと云うと云うと云うと云うと云う
花を初に言ふと云うと云うと云うと云うと云うと云う
花を初に言ふと云うと云うと云うと云うと云うと云う
花を初に言ふと云うと云うと云うと云うと云うと云う
花を初に言ふと云うと云うと云うと云うと云うと云う
花を初に言ふと云うと云うと云うと云うと云うと云う

十 蟬丸

會坂蟬丸 仁明時道人常一子劉發世人
号首或仙人ト云々

三光流布 流世人有者下云八謡 一後撰は
初書抄の用也 往來云々云々云々云々云々云々

繫

心之從之遷之と流轉の心之世に因るもの
 一、家六道輪廻の法何我何誰親誰疎
 二、蔵寶鏡の凡文作種業感種果身相種種
 三、生殺右異生愚廟無智均彼殺羊之方力弱故以喻之
 四、文生非為死亦人忽然猶生之輪轉六趣死去死去
 五、沉淪之途生教又母不知生之由來受生我所以示
 六、不悟死之期去頭遺去果之不見其首歸未來
 七、漢之不身其尾三辰戴頂暗同狗眼五獄戴冠
 八、迷似羊身其常之日ノ繁夜食之獄起逆遠逆
 九、樂名利之坑
 又云四生者不識盲生聾生瞶生死死宜死冷

十二冬藏皇

姓野 冬藏 在冬ノ野野相
 手毛人 大能冠中の冬野

敏達天皇 春日皇子

小野 正位
 妹子 正位
 毛野 正位
 承見 正位

次守

皇

皇

保衛 阿波守
 皇

は第之被軍早の紀身

葛城

道成

能書

官六文章生彈正志大内託蔵人

少東宮宮子士彈正少弐

和元年正月廿九日遣唐副使

船次舟次流

年十二月廿初一日皇内

舟より急上病を病病とて回命と遊遊とらる律
先法上依て死罪等と降して遠海に處する也
とて海に國を航流航流する也此記記も舟の船
ありそのひく本使上奏して改く舟の船より
舟の大使を舟の船より舟の船より舟の船
副使官を舟の船より舟の船より舟の船
とて遊遊とて遊遊とて遊遊とて遊遊とて遊遊と
作りて遣唐の使とて遊遊とて遊遊とて遊遊と
犯して遊遊とて遊遊とて遊遊とて遊遊と
は罪とて遊遊とて遊遊とて遊遊とて遊遊と
流して遊遊とて遊遊とて遊遊とて遊遊と
系し合八年四月十九日卯の位より遊遊と

十二年正月十二日奉議より同日舟を遣唐
系し仁安二年十二月十九日三位國正百卒より
又遣唐の事より三十一日奉議より遊遊と
丁無無恐善とて遊遊とて遊遊とて遊遊と
舟の遊遊とて遊遊とて遊遊とて遊遊と
遊遊とて遊遊とて遊遊とて遊遊と
とて遊遊とて遊遊とて遊遊とて遊遊と
又一遣唐使より遊遊とて遊遊とて遊遊と
ありそのひく遊遊とて遊遊とて遊遊と

又一

古今旅
遊遊とて遊遊とて遊遊とて遊遊と
遊遊とて遊遊とて遊遊とて遊遊と
遊遊とて遊遊とて遊遊とて遊遊と
遊遊とて遊遊とて遊遊とて遊遊と

在令親書一少兒のくせはあつたまゝのついで
 てかへりてあつたまゝのついでかへりてあつた
 まゝのついでかへりてあつたまゝのついで
 一少海海乃播かむ一少海海乃播かむ一少海
 海乃播かむ一少海海乃播かむ一少海海乃播
 かむ一少海海乃播かむ一少海海乃播かむ一少
 海海乃播かむ一少海海乃播かむ一少海海乃
 播かむ一少海海乃播かむ一少海海乃播かむ
 一少海海乃播かむ一少海海乃播かむ一少海
 海乃播かむ一少海海乃播かむ一少海海乃播
 かむ一少海海乃播かむ一少海海乃播かむ一少
 海海乃播かむ一少海海乃播かむ一少海海乃
 播かむ一少海海乃播かむ一少海海乃播かむ

威少一親書一少兒のくせはあつたまゝのついで

平代 十一 僧山通昭 俗名良本宗貞 号花山信正

平代 桓成天皇 平城天皇

平代 平城天皇

平代 淳和天皇

平代 宗貞

由信 僧部

冬調六月廿日

延暦元年賜良本朝臣姓法眼權僧正元曆寺産菩提院

平代十六 仁明

深平乃母の御分は諸人あはれひんがはは

海にさしてひのふればたつていざあつて

香らそむ又あつてふかてあつてあつてあつ

その海をわたりてゆくはなはた

みづの底のなまめをのぞきしむるは

五平五平のうたをうたはせしむるは

古今のうたをうたはせしむるは

のうたをうたはせしむるは

津姫と青のうたをうたはせしむるは

とくはなをうたはせしむるは

いふはなをうたはせしむるは

いふはなをうたはせしむるは

昇龍のうたをうたはせしむるは

あはれいふはなをうたはせしむるは

あはれいふはなをうたはせしむるは

時はうたをうたはせしむるは

いふはなをうたはせしむるは

いふはなをうたはせしむるは

いふはなをうたはせしむるは

いふはなをうたはせしむるは

いふはなをうたはせしむるは

いふはなをうたはせしむるは

いふは

いふはなをうたはせしむるは

いふはなをうたはせしむるは

いふはなをうたはせしむるは

いふはなをうたはせしむるは

五平

建仁三三女大内記

後鳥羽院建仁のうた

いふは

十三 陽成院 詳貞明 在位三年 清和元年九月九日洛師入道

文德天皇 清和天皇 湯成院 天曆三年九月九日洛師入道

貞觀元年十二月十六日降詔 同日皇太子

同八年十一月九日受禪 元慶元年正月九日

同八年二月官讓位 天曆二年九月九日崩

又云湯成院と云云院と云云位と云云院

治孫 上ありしん

はくそひのちりあひの川意を後り御なり

初はけりあひのけりあひの御なり

川は常陸乃又あひの御なり

りり事のあひの御なり

く御なりあひの御なり

はくそひのちりあひの御なり

ともしんあひの御なり

奇也あひの御なり

しやあひの御なり

昔もあひの御なり

人にもあひの御なり

源融 湯成院 於六條河原院 撰壇電備

十四

河原左大臣

皇正位下人原金事

撰壇電備

五十二代 五十四代 源融 仁明天皇

源融 皇太子 皇太子

弘仁三年壬辰生 源融天皇太子 柶殿觀大臣之山庄

承和五年十月廿七日正四位下 服日 貞觀十三年

八月廿五日任左大臣仁和三十二年十月廿七日後位即位
同五年尊号車尊元平二年奉政事元年八月廿
五日薨七十四 同廿八日贈正一位

古今
法皇此のふもらむら惟のこもさうりお
古今此のふもらむら奇のふもさうりお
ししその序の思のふもさうりお
君のふもさうりおの思のふもさうりお
ふもさうりおの思のふもさうりお
みさうりおの思のふもさうりお
法皇のふもらむらと奥列信天邪と
と致しつけふもらむらと致と知とさうりお
知とさうりおの思のふもさうりお

十五 光孝天皇

詳時原 仁明帝三子 在位三年

仁明天皇

文德天皇皇 皇太子

宗康親王

皇太子 藤原子 贈大正天皇

光孝天皇

由宗康親王

天長七年庚戌降詔 兼和正七叙皇品同十二年

二月元服同廿五年正月常陸守 嘉祥元年

五月 中務卿

仁壽元十一廿三品廿二 貞觀六年上野守同

十一二七二品廿二 同十八年十月或之元慶六年七品

同八年正月大宰帥 同二月四受禪廿二

仁和三廿廿讓位即崩廿二 八月廿薨 小松山

古今永

君の火の野にまじりて業つじ我を事し常いかに

刻者仁和乃をしを母かしく多う対し今うこれ

予まじり多う業とあり仁和乃清く則ち老あり

也若業の中ふふの咲とあり成く誰とさすも可

業憂ふと眼まじりし多う病邪氣とのまじり

との七種の業美義と倍もる也聖の事にあり

用より深成の倍も若業上下の巻と此の成はは

てのありはひかしく卒之かしく此位はははるなり

文徳乃のみと應と此をさし清和の成せもすく

たしく湯成の出来と建行すして建の成あり

わら即位し然るに徳乃のささ加り今うはは

る心邪也又此心邪の事あり業平の徳あり

刻者乃のまじりし多うわらり今う上下の成業

とまじり対し清くさすまじりものなり七周の成あり

屋も好むの成し常とありひくも業とあり

いふいふ常と艱難ありし多う就まじり

まじりぬい若方とまじり人同様の成りたるた

めとまじり上下の成ありまじりし多う成り下

とまじり事ありこれありまじりし多う成り下

位とまじりし多う成りし多う成り下

少くい業平とまじりし多う成り下

入行なり

新勅撰の心あり

十六中紙言行平 在原氏号在細言

桓氏天皇 平城天皇 河保親王

伊豆内親王

古今離別永

まゝれ家々心成生まろね

古今昔の事ありては

そと又世々心成りては

そと又世々心成りては

そと又世々心成りては

そと又世々心成りては

そと又世々心成りては

そと又世々心成りては

そと又世々心成りては

そと又世々心成りては

そと又世々心成りては

そと又世々心成りては

そと又世々心成りては

そと又世々心成りては

そと又世々心成りては

そと又世々心成りては

そと又世々心成りては

そと又世々心成りては

そと又世々心成りては

大抵人

在原年

在原年

在原年

在原年

在原年

在原年

在原年

在原年

在原年

在原年

在原年

在原年

在原年

在原年

在原年

在原年

在原年

在原年

在原年

在原年

在原年

在原年

在原年

とくはまを頼り

十七 在原業平朝臣

号在五中將系園行平也

蔵人蔵人右馬次 從四位上美作權守

元慶三年正月廿八日卒

千早振代と云ふ人物同くこれあり水々此を

初き之を此のまゝ文乃やとんかひく

屏向と云ふ門よりみらるる道と云ふ

と云ふくありありとありと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

又寛平乃文治元年三月京師一也

叶由公三回封也うしにけらうけよあの家をいひ

事平がやひ筆業のあはれいふとあはれいひてき

川とぬらふれくるといふもいふもいふもいふも

叶由三回河と深きせつあはれいひてき本家よ

て河とくくせりて月事いざらふなとく先

いしとるあはれいひの書根を

母紀在序女

従四位下

藤原敏行の位

敏行守 梅察 隆興守

三本下

武智磨

三本

村富丸

敏行 伊衛

武智磨

三本

敏行 伊衛

三本下

古今

住乃江の序より彼よりあはれいひてき

寛平乃叶対未とあはれいひてき

序よりいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

十九

伊勢

七本下

文治

内唐 貞復

三本

家宗

三本下

伊勢

同権

のち

耶波... (Main text on the right page, written in cursive)

方と... (Text block on the right page)

元良親王 (Red title)

陽成院 元良 (Red text)

信... (Text block on the left page)

後撰

信... (Main text on the left page, written in cursive)

古今詠

平城天皇 阿保親王 大江普人 後四位下 推命

在原行平 在原重平

千里 帝人金男

月夕まゝのこゝろをわが心は秋の風
日湯乃氣をまじりて心は秋の風
かゝるあゝらみし心は秋の風
まねてのこゝろをわが心は秋の風
浪をたぐりて心は秋の風 廿七下十ハナリ
はる下同心下白秋天下万民乃愁 秋
これ一牙の秋はわが心は秋の風
秋とあり秋とあり
秋とあり秋とあり
秋とあり秋とあり

夢子楼中霜月夜秋来只為人長
大座四時心物若新中腸動是秋天

志 菅家 小座天神也 在大正三位 在大將賜大政入正三位

天穗日命 天照大神之孫 天孫御祖 天孫御祖 天孫御祖
天孫御祖 天孫御祖 天孫御祖

菅家 菅家 菅家 菅家
菅家 菅家 菅家 菅家

いふふいふわが心は秋の風
刻々 朱雀院乃心は秋の風
ふふふいふわが心は秋の風
と強の字と心は秋の風

此の世に... 御代に...

共 貞信公奉平 拾遺 小僧大政大臣 昭宣公四男

院議大臣 奉公 昭宣公
冬嗣 良房 基經 時平 本院議大臣
仲平 院議大臣 從三位
兼平 中御堂内卿

封信濃國 貞信公 在三位 賜正位 師輔 九代老幼想

拾遺

小倉公の... 御代に... 申して...

... 御代に... 申して...

... 御代に... 申して...

幸ひなきよりしるをなむぬかぬおれさしそし身よれ討
し不遇ありおれをを 凡ば奇の折凡倍ともあたらと
いつかた奇可として

六七 中納言急捕

大中将、利基男、号擇細玄、右衛門督、從三位

系圖三系孝長公見たり 兼平三年薨

ね右

みの原にたてあつる泉川の面にたてをうらひらるらん
朝更今日もむらむら奇の公もまさ不舎意とも又
未だ意くたあゆむいとむかへく泉の縁を意く
くしらへくむらむらいとむかへく大席奇くこむら
くくしらへくむらむらいとむかへくおれえぬ
くくしらへくむらむらいとむかへく我れあや
くくしらへくむらむらいとむかへく年月は

あつるひおれくくくしらへくむらむらいとむかへく
くくしらへくむらむらいとむかへくはははははははははははは
くくしらへくむらむらいとむかへく又泉川の浦に
くくしらへくむらむらいとむかへく名をいふ
くくしらへくむらむらいとむかへく名をいふ
くくしらへくむらむらいとむかへく名をいふ
くくしらへくむらむらいとむかへく名をいふ
くくしらへくむらむらいとむかへく名をいふ
くくしらへくむらむらいとむかへく名をいふ
くくしらへくむらむらいとむかへく名をいふ
くくしらへくむらむらいとむかへく名をいふ
くくしらへくむらむらいとむかへく名をいふ
くくしらへくむらむらいとむかへく名をいふ
くくしらへくむらむらいとむかへく名をいふ
くくしらへくむらむらいとむかへく名をいふ
くくしらへくむらむらいとむかへく名をいふ
くくしらへくむらむらいとむかへく名をいふ
くくしらへくむらむらいとむかへく名をいふ

六八 源宗平朝臣

右系系平、正四位下

續名今作者

光孝天皇 是忠親王 宗平 院名君

三光院御院此世常皇系圖不載之りや

或説光孝天皇御孫 教正子之 教正天皇親

右兵衛尉兼左兵衛尉 泉内将國^生 隆身

主事忠介

右衛門尉生 御厨子所定外膳部 抄津合

有明のつとめくみるのり曉つりり記のいあり

名譽のあつていさよ言ひもた **杜東** 集^集とて

百折ありゆと直代みえあふの法天白雲のそ

と集りてゆとせしとふと海意とありて流し

手の意いふと **集** 意いふととふと海意とあり

とふととら **紙** 記いふとと今意とありていふの

あ清不子と意のあつていふとと一と首とあ意とあ

入るに事ある **集** 記今部とて行要とありて海流

しとふとと意とふと不用といふと今とありていふと

とふとていふと **集** 記今部とて行要とありて海流

とふとていふと **集** 記今部とて行要とありて海流

とふとていふと **集** 記今部とて行要とありて海流

とふとていふと **集** 記今部とて行要とありて海流

とふとていふと **集** 記今部とて行要とありて海流

とふとていふと **集** 記今部とて行要とありて海流

とふとていふと **集** 記今部とて行要とありて海流

とふとていふと **集** 記今部とて行要とありて海流

とふとていふと **集** 記今部とて行要とありて海流

とふとていふと **集** 記今部とて行要とありて海流

とふとていふと **集** 記今部とて行要とありて海流

千五百又の事ありてい

三 紀友則 久也記 紀有友子之或長彦孫也

孝元天皇 彦太息信命 小倉十六代之孫 振長



有常 有則

宗庭 行廣 兼物

久望乃免れく久紀喜の日記... 宗庭 行廣 兼物

時言... 花の... 何とて... 不書... 人の... 花の... 花の... 花の... 花の...

世四 藤原興風

淡海を元京五

三木 道成

後深草院

道成

興風

藤原

道成

永谷

道成

興風

古今

唯と云ふ人よん言ぬる事也し一のあめりて
むしらすもろおしくまより年老てぬしや包一の
まゝいふに今幾いふやうかあり或も
たたりていふやうなむいふいふ
のいつはけ朋友らふらむにむしやむしや
しり年ぬるむしやむしやむしやむしや
みぬおぬと知ると知んかしてむしやむしや
いつちく家業^宗家業^別と来りてむしやむしや
又むしやむしやむしやむしやむしや
むしやの末に暮れむしやむしやむしや
南子のむしやむしやむしやむしや
くむしやむしやむしやむしや

世五 紀貫之 系圖右則が身なり或説紀文新子

童名河吉久曾と 本工権从 後位上 御書前親

古今

今といふもろもろの事也し一のあめりて
刻むるむしやむしやむしやむしや
くむしやむしやむしやむしや
かむしやむしやむしやむしや
いにそらるる梅乃花なりとあり或も
家集といふむしやむしやむしや
うむしやむしやむしやむしや
あむしやむしやむしやむしや
とむしやむしやむしやむしや
乃とむしやむしやむしやむしや

やうに思ふとよみて人びとのあつめあひは
たのしみなり誰れかよきていひて思ふとよみて
めりの能くきりかたおしよるよとて式不知と書し
連歌のて用いふ思ふとよみて初し連歌のて中
ふもよと下とよ書し思ふとよめても思ふと
又思ふとよと書し思ふとよめて思ふとよめて思ふと
ふもよとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふと
思ふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふと

友

友乃夜をまことし思ふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふと

共 清原深美良父

從五位下内道元 藏人所雜色

先祖不見二流考前守房
則男二流考後及海陸孫房
則子二可守之

又日藏元

初き月乃思ふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふと
心き只友乃思ふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふと
しひうとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふと
とふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふと
月乃思ふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふと
かふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふと
は思ふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふと
それとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふと
卯歌乃思ふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふと

也(あり)

世七 文屋朝康

先祖不見 文屋康者四男

治保 延喜之紀 武説延喜二年 侍人舍人元
印乃思ふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふと
向乃思ふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふとよめて思ふと

かへいえいこ

世元 久謙守

美濃掃守 元暦二十二年

光孝天皇

高橋氏 弘聖 御 天曆二十二年

淡茅生れ花のあふ名女子さしてあつてあつたあふ

ささ序多し淡茅生れ小蛇あふあつと奇れあ

あふま〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて

あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて

あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて

あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて

あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて

あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて

あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて

あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて

あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて

あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて

平兼盛

後五位正 駿河守

光孝天皇 是志親王 興雅王 萬行 兼盛

上東門院女房 赤津衛門

あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて

天徳乃奇命の〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて

あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて

あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて

あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて〜あつて

拾遺

ふみかぶるに... かのひらぬあつら

甲一 壬集忠見

本集忠實 壬集の男

伝建

天徳二年 任振津大目

意として... 天徳二年... 任振津大目... 天徳二年... 任振津大目... 天徳二年... 任振津大目...

あの方を... 色を... 也... 儀

甲一 清原元輔

清原元輔 女孫前守

高直利生女

肥後守 後五位上

後水

契之... 御... 儀

初... 御... 儀

君... 御... 儀

奥... 御... 儀

波... 御... 儀

味は...
...年月...
...
...

甲五

藤徳公

一惟抄改作
九條右丞相師輔公男

世公後撰集 撰し... 時威少將 和歌所奉造
藤徳公の諡号 太政大臣常官 薨す... 必在之

一國封... 仍中右以来無之 必薨 特辞 退

貞信公

九條右相
師輔

伊弉

義孝

行成

人長后
在長后下
春宮亮
権右衛門守亮
天禄二十一 薨す... 必在之

於建

あ〜
...
...
...

甲六 曾祢好忠

先程不見
寛和以人
位母...
仍号曾母

源重之

皇信子 皇孫志為家

清和天皇

貞元親王

皇忠 賜源姓

皇信

重之 相授字

冷泉院坊持第一刀

白紙

風よるる若くは波のよむのよみて地成りて

初より冷泉院の事文よりくす時百首ありて

あり紙に公をうらたけをそ愛さ人の心よそを

そやそ浪と我身よそそそそ也序

いゆきししれんこもやそわを面白く

そそ院の流の白紙とゆくとそ風とゆ

そそとゆとそそとゆとそそとゆと

そそとゆとそそとゆとそそとゆと

祭主 祭主 輔基 男

甲九 本中臣法宣朝臣

天兒唐根十九代孫 常般 足連公

始賜字に連 本者卜部 中長者主神事之宗源

可多 能柘連 公國子 大連 公國足意 表唐 清唐

今唐 常唐 足良 輔道 輔基 能宣 輔親 輔經

白紙

みこと守湯土のくく火のんりひひひは地と

むらむらありは守内裏の沖垣と守人 衛士

たお門の下のくそくたをのふはりはと守也

火火とそそ守と守と守と守と守と

火の清と唐とそそとそそとそそと

ひしほのふとよと体一かきぬ物よふらふるま
せんまはれとほつひの井はまもせとそ人か
つらんまららるるを控くまらるる公を
ひらいてひとせらるるまらまらとくまひく
見ゆ人まら

平 藤原義孝

謙徳公三男 号後打将
中務卿 大明親妻

右打将 従五位上

系图見 謙徳公下

或説 康平三六

配清光四子 此等不書

考多ありしゆりし余らふくもゆかりひはれ

初より女ありしゆりてはらうらふありは朝
のちみらくし心をまらありしゆり余にん
かるとまのりくははらふるまらるる

川にぐ余ら長くしゆりまらるるまらるる
やうてふまらるるまらるるまらるる
ふありてまらるるまらるるに我公のり
くまらるるまらるるまらるるまらるる
はらうまらるるまらるるまらるるまらるる
去らふありまらるるまらるるまらるる

五十一 藤原實方 朝臣

右打将 正下

陸奥守

貞信

師尹 九命

定時 正人

實方

長徳四十三 於任国

かきまらるるまらるるまらるるまらるる
伊勢ふとまらるるまらるるまらるる
あまらるるまらるるまらるるまらるる
とまらるるまらるるまらるるまらるる

今も昔も同じく世にたまたま
 ありし胸のあまのこころえの
 ことごとく切なる心づかい
 としむるまじきことありさ
 らぬことわづらひの御心
 事なればはたしむるまじ
 しくもあらざらんこと
 只自然のまじきことあり
 ともてはたしむるまじ
 しくもあらざらんこと
 同時の敵と人としてあり
 初由の事とありて折る
 事とさゆふことありて
 いかんか礼符よありし
 東方の事とありて

今も昔も同じく世にたまたま
 ありし胸のあまのこころえの
 ことごとく切なる心づかい
 としむるまじきことありさ
 らぬことわづらひの御心
 事なればはたしむるまじ
 しくもあらざらんこと
 只自然のまじきことあり
 ともてはたしむるまじ
 しくもあらざらんこと
 同時の敵と人としてあり
 初由の事とありて折る
 事とさゆふことありて
 いかんか礼符よありし
 東方の事とありて

再三 藤原道信朝臣

恒徳公トコノリ男 母謙徳女

九兼右近相 京極法住寺
師輔公 恒徳公 道信
 大中将 後四位上
 母謙徳女 正暦五年卒

信様
 心あすこころえの御心
 事なればはたしむるまじ
 しくもあらざらんこと
 只自然のまじきことあり
 ともてはたしむるまじ
 しくもあらざらんこと
 同時の敵と人としてあり
 初由の事とありて折る
 事とさゆふことありて
 いかんか礼符よありし
 東方の事とありて

又八海首... 後の夕... 別り... 公... 知... 了...

平三右衛門大将道隆母

東三条道隆白 本朝古今表人之内

九条右衛門 兼家

道隆

伊周

道雅

長良

道兼

長良

昭宣

道隆

高経

伊周公系... 皇太后... 皇太子... 皇孫...

欽... 初... 多... 少... 物... 伊周公系...

初... 多... 少... 物... 伊周公系...

平四儀同三司母

儀同三司 伊周公 母 後三位高階成忠女

伊周公系... 皇太后... 皇太子... 皇孫...

の波さうさ波の波ありは事し青影殿
ありしかりと見えしも事し存ありしと
事しあり後之の言も改むること
さうさうりく音のゆもさうさうり
ゆまど打なめはくもてさうさうり
てゆまのえもはくもてさうさうり
なとさうさうりもゆまのえもはく
しやゆまのえもはくもてさうさうり
ゆまのえもはくもてさうさうり
ゆまのえもはくもてさうさうり
ゆまのえもはくもてさうさうり

平六和泉式部

上東の院女房 次は雅致女
由緒中守保衛女 中置内親王許乳母侍

和泉守道貞 妻ト云 仍号和泉式部云

一説高遠 奈正三位 筑前守佐四下
次貞高 女子 上東の院女房

右一説有ト云 拾遺第廿云

雅致 美云 致実実

今記わくくさる中に入あ言遠くさうさうりの御所

證本必世流し用之

あしとんはむれおのさうさうり

あしとんはむれおのさうさうり
あしとんはむれおのさうさうり
あしとんはむれおのさうさうり
あしとんはむれおのさうさうり

てみぬるもしむるも... 三のうらむ... へ

平七

紫式部

新前守為持女

東内院女房 或権馬司殿女房

系図前下り
中納言兼輔

平南院下 西院下
惟正

箱根入道 母平太公女
為時

原氏物語作者
紫式部

宣春妻平太公女

紫式部カ若ノ事下流成物結ル者之畧ニ

めりありし事也有...

刻者... 風そりあり... 三つひくく... 心して...

凡意の事... あり但此... なること...

平八

大貳三位

右衛門佐宣春女

母紫式部

後一条院御乳母 後冷泉院御乳母

大貳位中 藤原素行 竹号大貳三位

高藤 定方

朝頼

為輔

宣孝

女 宣孝 大貳三位 校長作者

有間山... 有間山おろる所原風... 初より... よめるとあり...

公事あり用一入侍の如きことありしに
りたりあり也古事之略之れも首家女を
ありしに由り序あり其境よりして
公の公よりなり今なきことありしに
いしに由り序ありてはしり
そこの公よりなり今なきことありしに
そこの公よりなり今なきことありしに
そこの公よりなり今なきことありしに
そこの公よりなり今なきことありしに
そこの公よりなり今なきことありしに
そこの公よりなり今なきことありしに
そこの公よりなり今なきことありしに
そこの公よりなり今なきことありしに
そこの公よりなり今なきことありしに

平九 前深衛門

平九

前深衛門

上東院女房或鷹司殿女房

一説先考天皇是忠親王平葛行平兼盛平深衛門

或大隅守兼注時周女^室仍号平深衛門

平深衛門
妹通之
余等

後松

平九 前深衛門

初より中園白のおくゆき

ておのひよりゆき

女よりゆき

とゆき

いふ後梅

あつて... こと... こと... こと...

あまの... こと... こと...

あまの... こと... こと...

あまの... こと... こと...

中 小式部内侍 和泉或守橋道貞女 母和泉式部

橋諸兄半世孫仲遠道貞小式部内侍

大い... こと... こと...

あまの... こと... こと...

あまの... こと... こと...

あまの... こと... こと...

あまの... こと... こと...

あまの... こと... こと...

あまの... こと... こと...

あまの... こと... こと...

あまの... こと... こと...

あまの... こと... こと...

あまの... こと... こと...

あまの... こと... こと...

あまの... こと... こと...

まのふらふらとて無名園り事し業業を
いひし人秦さうされし物とゆえれくわし
時は無名園鶴りさうわさり人さうさ
業業考う三子れ客れ中一離鳴とて鶴りゆ
もろ老ありしれ鶴の啼ぬとれまことの鶴
も啼りつるれさう園とあけくまゆかえと
もろさう孫てくさうとそりあけはれり
よる羽の字く古言しやわ伊勢物語六ふふ
事さうれしつ類を紙にぬきしとふ年と
みろ我れ二店面白くさうまてまあ
とやわわわんぬのすりさうさうわい
たさゆいれしとさうひある事さうひ
ゆわをれれしとさうさうりてなれま
とさうれしとさうさうり

三十三 九家全史道雅

師内官 伊周公男
大能言 重光世

伊周公 道雅

女子

上東門院女房 元人
大和宣旨 後拾遺作者

後拾

まはくさうさうさうりてなれま
刻す伊勢乃妹まさうりつるのわめけり
あひてかひさう事とむらわさうりつる
さうさういれまてなれまあひさうさうり
なれまさうりつるあり年心まのりつる
おはれまてなれま後拾遺
おはれまさうりつるさうりつる

賢のありてまはれ候もさういふに御座りしかば

孝徳の御代は御座りしに御座りしかば

みまはしりし御座りしに御座りしかば

ら乃まはしりしに御座りしかば

又まはしりしに御座りしかば

ふれはしりしに御座りしかば

少くも御座りしに御座りしかば

乃て御座りしに御座りしかば

こゝろに御座りしに御座りしかば

あつた御座りしに御座りしかば

少くも御座りしに御座りしかば

乃て御座りしに御座りしかば

心も御座りしに御座りしかば

序の御座りしに御座りしかば

乃て御座りしに御座りしかば

乃て御座りしに御座りしかば

乃て御座りしに御座りしかば

乃て御座りしに御座りしかば

乃て御座りしに御座りしかば

乃て御座りしに御座りしかば

乃て御座りしに御座りしかば

乃て御座りしに御座りしかば

六十八 三條院 諱辰貞 冷泉弟二御子 在位五年 御皇太后御孫 東三条入道極致東家公女

天延四正三條院 寛和七十六 東宮 今日元服 十一女 寛弘八即位 廿多

長和五正廿二讓位 寛仁元四廿九出家 同五月九日崩御 廿

村上天皇 冷泉院 **花山院** 三條院

同融院

一葉院

三條院

公の御代は御座りしに御座りしかば

乃て御座りしに御座りしかば

そはくをよこあそくはくをよこそ

十一 大納言経信

中納言源方男 女源国威女

定多法白皇

敦實親王

重信

源方

経信 佐頼 佐忠

金三

クムル河内稻家言法之若くは若女稻家稻家

は若女稻家稻家言法之若くは若女稻家稻家

は若女稻家稻家言法之若くは若女稻家稻家

は若女稻家稻家言法之若くは若女稻家稻家

は若女稻家稻家言法之若くは若女稻家稻家

は若女稻家稻家言法之若くは若女稻家稻家

は若女稻家稻家言法之若くは若女稻家稻家

は若女稻家稻家言法之若くは若女稻家稻家

は若女稻家稻家言法之若くは若女稻家稻家

は若女稻家稻家言法之若くは若女稻家稻家

十二

祐子月親王家

紀伊 散位平経方女 由小井

祐子月親王、後朱雀院中二皇女、中宮源子

敦康親女

紀伊守重経妻

紀伊ト云キトカリヨム 栲津ツツトイ

桓武天皇書原親王高棟惟竹乾時皇舅叔親信

行義

範圍

経方女 金三 二宮 経信より同也

金三

弟小園の流れあはけけわ神のまゝに

流流りあけけわい合り時中納言 俊忠

金三のまゝに流流りあはけけわい合り時中納言 俊忠

は若女稻家稻家言法之若くは若女稻家稻家

これぞよき事よ美らしく思ふに
きやん驚りてきやんのうけ
かろあていし
袖のあひら
しひあやせし
少くは面白くゆきよ

七十二 権中細言二重房

母柳若親女正三位大藏之左衛門推師
号江師

大江音平中四下位を維特重中四下位光臣中四下位所舉周成所中四下位房中四下位

言及乃尾上信松此様之様方りあふもみさのあめん
月乃あやいさしり様は家にはくさけした
てあふしゆきり達望し様はあふもみさのあめり

しやあふいしゆきり様はあふもみさのあめり
初めあふいしゆきり様はあふもみさのあめり
あふいしゆきり様はあふもみさのあめり
あふいしゆきり様はあふもみさのあめり
あふいしゆきり様はあふもみさのあめり

七十四 源後頼朝住信之男御集

千載
うわあふいしゆきり様はあふもみさのあめり
初めあふいしゆきり様はあふもみさのあめり
あふいしゆきり様はあふもみさのあめり
あふいしゆきり様はあふもみさのあめり
あふいしゆきり様はあふもみさのあめり

初と千金石のくたは内如くもくもあは
ゆきまのくたは下とあはらるる原下
野のあし

七十六 法性寺入道前同白大政大臣
中進公抄改
同白大政大臣
一位法有出觀

知延院同白男 母六条右大臣顯房公女

道長 道長同白 賴通 後三条同白 師實 後醍醐寺同白 師通 後醍醐寺同白 良經 母三河守同白

忠實 忠實同白 忠通 法性寺同白 忠貞 忠貞同白

母左大臣俊成女
母左大臣俊成女
母左大臣俊成女

詞苑

見し乃原のれはてなほ久世風を舟にゆきあはれ
初きは新院位よがしとくしつゆとをあらとく
とく世行をゆきとあはらるる心と心とく

くつてりも世とく心とく心とく心とく
あはれとく心とく心とく心とく心とく
かややとく心とく心とく心とく心とく

春水船如坐天上とあり又と又貞
勝王國

秋水長天一色とありとありとあり

あはれとく心とく心とく心とく心とく
あはれとく心とく心とく心とく心とく
あはれとく心とく心とく心とく心とく
あはれとく心とく心とく心とく心とく

七十七 崇徳院 詳顯仁 鳥羽院年一白皇女
母侍賢内院時言事貴女權白院指言

元永二五十八降教同日九月九日為親王保安正并八為

太子即受禪 同日十九日即位 大治正

朔元服 十一日 永治元年十二月七日讓位在位十八年 傳元七

廿二配流讚波國去十日於仁和寺出家 長寛二

十八六配所崩年 追号山宗徳院

詞苑



御所を遷す事云々 御所を遷す事云々 御所を遷す事云々

未だあはれなき御所を遷す事云々 御所を遷す事云々

源為朝 後白河院 三男 後白河院 下 皇太子 進

金葉

淡路守... 皇太子... 皇太子... 皇太子...

とあり海島といふ諸侯の所はたつていふに
國守の下りくも任えとありぬ也
とあり海島地格と海島家といふは
とありくも一夜も諸のさあはる國守は
とありいぬといふは又ありぬ
外は保あやんといふのまこといふは
とありぬ保さききりては兼昌と海川流
乃後の百首乃作るといふは百首といふ
人といふはつてたましく黄門の心といふ
へといふは

豊政不^レ**九**左京主頭補

條理全^三顯^三者
國^三集^三持^三者
号^三六^三条^三家^三和^三平^三一^三流

房前 貞右 經純 宗通 真通 連茂 依志 時辨

賴任 登經

頭孝 頭補

家保

家成

澄孝

頭昭

頭家

經家

行家

隆博

有家

有家

澄教

保孝

待任

新古

秋風...の...
刻...
心...

刻...
心...

とも心はなる月を國にあらはせり
あきまを白くみゆはくはつらん
みまらるる心なる下はらまはるる
源成地落しをわかれをはげしき
雪よみれをなほくはる月とゆわく
あはれつは心乃ち思ふはり
今知たあり又あつれはるる
月在浮き深は明なり
同し也

八十

侍賢院院河

休祇伯親仲女

持上太子皇子 傳中書 御下

具平親王 師房

頭房

頭仲 院河

侍賢院 皇房

侍賢院 白川院 御猶子之 顯仲之 男女七人 撰集 入之

仲房 有房 忠房 侍賢院院河 家氣は院河也 於可劫

は内は院河別 予也

千載

あつれ心も志も思ふはるる
刻すは後羽意とあり 院河家集に
こけりありと心なる思ふ
公七もも思ふはるる
こもも思ふはるる
いふも思ふはるる
いふも思ふはるる
いふも思ふはるる
いふも思ふはるる
いふも思ふはるる

公實貞

八十一

後徳全寺左大臣

實定公 母中納言 後志女

侍賢院院河 宗徳後白川三代国母
實定公 實定公 實定公
實定公 實定公 實定公
實定公 實定公 實定公

之と打歎くものありて

十六 西行法師

俗名成清或則清又尾清
藤原康清子又美康清鳥羽院下白

藤原豊澤村雄考郷干部将軍斎藤行

公亮左衛門尉公清右衛門尉季清左衛門尉康清右衛門尉義清右兵衛尉

予哉
ふくしそ月也く地然ありていふ成りて家海平

月前意あり心終夜月じいひるらありて

地ありて月ありて心ありていふ成りて

りたるといふていふていふていふていふ

乞ふなり乃風骨ははるる如く記し上り

ふらとていふていふていふていふていふ

果敢ていふていふていふていふていふ

座より本れ美く移居ありていふていふ

いふていふていふていふていふていふ

乃多一人初く又白来ていふていふ

莫對月明思往事損君顏色也博君年

手より女房へ送るべきなりていふていふ

十七 寂蓮法師

後成 定長 寂蓮
後成卿稿子定若後海之あり

後海 河内掾

明月託云建仁二年七月廿日午時許参り元中寺

大佛入道逝去り由り未問及欣聞之即退出之依

為輕恨身也浮生無常難不可致与今問之哀

勤之難禁思自切レ之有久相馴レ已及數世思况於
和奇道有傍輩者華辛已以奇異之送物今神
泉為道可報於身可悲又是家其奇レ
こレ事道逝去の時

め古

玉三の世れりたまま事をほし住をれれ
村白の身をこひ程の身を考られた妙の言
は奇と奇人換の身を考られた村の白の身
小又の身を考られたこの身を考られた又の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身

ほその身を考られた村の白の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身

皇嘉門院別當

源信澄女

皇嘉門院重子 法性寺園白女女 又納言家道女
出家徳流后 道衛流唯女別當ハ物ツカドレ職

具平親王師房師忠師澄女 皇嘉門院別當也

之師の女也

入徳三三三

念五正五下

女下親實女也右の師

女也

十我

非波江の身を考られた村の白の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身
この身を考られたの身を考られた村の白の身

刻多板政を名臣に約する時家の方途は務む
 多意といつて之をあらうとありて部族とて
 確のいさそとてあはれはる海軍とてこれ其
 子孫ありては之を信く事し海軍とてこれ其
 一とていさそとてあはれはる海軍とてこれ其
 一とていさそとてあはれはる海軍とてこれ其
 一人のあはれとてあはれはる海軍とてこれ其
 一人のあはれとてあはれはる海軍とてこれ其
 一人のあはれとてあはれはる海軍とてこれ其
 一人のあはれとてあはれはる海軍とてこれ其

十九

武子内親王

後白河女三白皇女 齊院准三宮
 母後三宮成子内親王 齊院准三宮

後白河院

高倉院

海鳥羽院

土御門院

般高院

順仁院

武子内親王

中白皇女
 又中白皇女
 又中白皇女

玉乃徳をそとて徳のありてあはれはる海軍とてこれ其

百首の宮中世意なりとありてあはれはる海軍とてこれ其
 一とていさそとてあはれはる海軍とてこれ其
 一人のあはれとてあはれはる海軍とてこれ其
 一人のあはれとてあはれはる海軍とてこれ其
 一人のあはれとてあはれはる海軍とてこれ其
 一人のあはれとてあはれはる海軍とてこれ其

法定一なる水根行介心こまき事必あり
こころのちかきにはまことなり

九

殿内院大輔

殿内院、後白河天皇御
御

高藤公孫

中御言

九十年

三木

後上河原守

朝臣

行憲

信成
後上河原守
殿内院
大輔

或説菅原相八世孫菅原在良女

十我

女もあまのついでに
奇の心を海人の神を
もまじりてあはれ
てそら又わきま
らわきまのあはれ

て急がしむ事
葉の御所の
あまの血海相
あり紙に
まじりてあはれ
あまの血海相
あり紙に
まじりてあはれ

新
秋の暮れ月
本一
後京極物語
良種
経

かきしん 向心とありしとてしるは

九十五 参議雅至 刊之頼位初長男あり并祖 歌麿

師實 志教 頼輔 頼經

宗長 大正位三位
雅經 三位下位

新古 舟の野の山は月夜にまてはるしに夜はあり

橋家の心とありしは古今あり

みづのたけのこはしりてはるしに成るあり

とこふるとありし心とありしとありしとありし

かきしん 向心とありしとありしとありしとありし

作文位とありしとありしとありしとありしとありし

吾れ夜の心ありしとありしとありしとありし

九十五 前大僧正意圓 法性寺 慶長あり 後五位上 大僧正 天倉住持 仲老女

本ノ評道性 才守二代座主 證号意鎮号 昔水和尚

春長和元十六改若慈山又壽二記 聖五誕 嘉禄元九

其五入滅七十二日 嘉禄三三八 證号意鎮 滅後十一年 系圖あり

我 志多ありしとありしとありしとありしとありし

はたふ手親身と早下りてしりしとありしとありし

つし奇乃心法徳とありしとありしとありしとありし

主人の實作長久の下方氏乃女徳使まらんと

二六時中つしとありしとありしとありしとありし

ふりてとありしとありしとありしとありしとありし

法教と一切ありしとありしとありしとありしとありし

とわき行く民とあらねばいかに
多く一民と一言と重んずるは
心こころを重んずる事多し
彼亦るのちりりしは

河轉多ノ臣之類之書提乃依りて之松實宗公男

是後の神と信りて之を

九十六入道前太政大臣

大御言太皇太后
大御言正二位
大御言大臣
通言 公通 實宗 公經
号西園寺太政大臣又号
茶嘉祿年中建之西園寺

花より鳥より色は常あてなり
鳥より花より色は常あてなり
花より鳥より色は常あてなり
鳥より花より色は常あてなり

常あてなり色は常あてなり
鳥より花より色は常あてなり
花より鳥より色は常あてなり
鳥より花より色は常あてなり
花より鳥より色は常あてなり
鳥より花より色は常あてなり

九十七 推中納言定家
後醍醐男母若桂守親女
号京極中納言入道

定家母親忠女八景福院
藤原經生澄信朝長正二位
明靜仁治二九年
本意亮書改書亮後主定家

新古今撰者今之遺新抄撰者記号明月系圖

本の字よりなる所のクもさか居るやうに不承した

建保六年内裏より命ふらるれば言ひ可家なるを

一より下のものゆゑに玉座よりつくりたる

産産焼つてありてあると云ふ所の浦の又日の

ゆゑより下つたをたゞと云ふ所の浦のさうりたる

佐原の焼くをたゞと云ふ所の浦のさうりたる

と云ふ所の浦のさうりたる

と云ふ所の浦のさうりたる

乃のみ字ふをたゞと云ふ所の浦のさうりたる

振りてつたをたゞと云ふ所の浦のさうりたる

はさるるの浦のさうりたる

と云ふ所の浦のさうりたる

と云ふ所の浦のさうりたる

と云ふ所の浦のさうりたる

と云ふ所の浦のさうりたる

と云ふ所の浦のさうりたる

と云ふ所の浦のさうりたる

と云ふ所の浦のさうりたる

と云ふ所の浦のさうりたる

と云ふ所の浦のさうりたる

と云ふ所の浦のさうりたる

と云ふ所の浦のさうりたる

新抄

九十八 後二位家澄 前中納言大宰権師元澄二男
皇太子在冠實兼朝臣女侍感心弟第一之孫連法師智心
兼輔 惟正 為輔 伊秋 頼成 清經 澄時

清隆

元澄

家澄

澄祐

中納言

後二位家澄

待從

澄祐

号桐岡中納言

七生

二従

澄祐

中納言

後二位家澄

待從

澄祐

百人之内作者郭執

天子八代

天智天皇

三條院

親王

元良親王

執政

貞信公

大臣

河原左大臣

鎌倉右大臣

東納言

二人

十帝

持統天皇

後鳥羽院

二人

武子親王

二人

謙德

二人

三条右大臣

湯殿院

順德院

光孝天皇

法性寺用白蓮宗持教

後德全寺左大臣

公任卿

中細言

經信卿

家持卿

行平之

教忠之朝忠之義

巨房之

定家之

參議

重之

等之雅經

仲凡之

非參議

之人

道雅之

頭捕之

後之家隆之

官位之人

在厚業平

藤敏行

源宗平本中長能宣

友文方

源俊賴

友清捕

五位之人

友義為

地下之人

藤基俊

文屋康考

大江千里凡河躬體士生志今坂

春道列樹

紀實之清原深養文

文屋朝康

平惠威立生志見清原元捕曾教忠

源重之

源重昌

女房之人

友將道經

儀同三司女

官女之人

小野山可

伴勢

和泉守

業成

大貳三位

赤澤衛門

小寺內侍

伴勢

清打細言

相換用防

祐子月親

王家托伴

待賢

院城

白手長所院別當

殷富門流大補 二條院額收

僧正 三人

遍昭 行尊 意因

法師 九人

喜撰 素性 息廢 能因 良暹 道因 後惠

西行 麻蓮

紫外 三人

人唐 赤人 孫太至 蟬丸

神

菅家

父子三代入作者事 由不入作者人 兼書

天智天皇 持統天皇 遍昭 素性 志本 志見

湯成院 元良親王 三条左大臣 朝忠 康孝 朝康

後鳥羽院 順範院 顯輔 清輔

謙信公 藤義孝 後成 康道 三友

法性寺園白 後法性寺園白 後京極坊政

前大僧正意因

公任 定賴 兼成 小成 由成

經信 依賴 依惠 深美 實 武藏三任 元祐 清顯 實

業平 賴基 兼成 補 依 實 之 補

昔人一首之注款與代注之在之去
解其因若或失或同仍非一使而此百
有者道之取信和款脊肉字者之肝
心之信且似所悅又如取格為一冊作若
之系經也定是斬彼劫加之信經之多而若
事亦在之未決之事之皆皆同之連之同
眼之時不可補之夕也

丁卯庚辰元年臘天贊

野雪

夜之其竹敲之亦之凍融然



110X
307
1